

2004年(平成16年)3月7日 日 曜 日

本格化するユビキタス社会

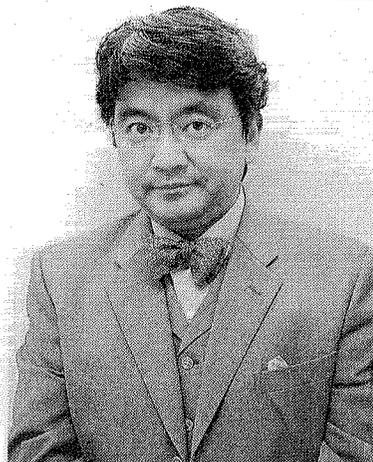
ITは文明どころ景観

「ITは文明どころ景観」
「ITは文明どころ景観」
「ITは文明どころ景観」

ポインタ爆弾や兵士が身につける
通信技術もまた通信技術がも
たらしたものだ。
新しい技術が幸せをもたらす
かどうかは、結局、使う側の姿
勢が決める。
日本はケータイ文化で人類を

中村 伊知哉氏

スタンフォード
日本センター研究部長



なかむら・いちや 1961年京都市生まれ。京都大経済学部卒。84年に郵政省に入り、マルチメディア政策、情報通信行政などを担当。98年に退官して渡米、マサチューセッツ工科大客員教授。2002年9月から現職。著書に「インターネット、自由を我等に」「デジタルのおもちゃ箱」など。

日曜けいざい

先導している。親指で歩きながらメールを打ち、写真やビデオを交換する姿は世界でも特異だ。そしていずれ、どの国よりも先に、テレビ局の中継車なみの機能を手中にする。一億人の歩くテレビ局ができあがる。そのとき、どんな情報を世界に発信しようとするのか。
女の子たちはいま、自分たちだけが解読できるケータイ用の文字「ギャル文字」で語り合っている。活字離れたが文字離れではない。平安時代の女性は仮名文字で当時の世界文明をリードした。千年後の平成女性はギャル文字で世界を先駆ける。それは果たして進化なのだろうか。退化なのだろうか。
ケータイやパソコンだけでは。服もクツもクルマも家具も台所もみなコンピュータのチップが埋め込まれていく。モノとモノが互いに通信しはじめ

新技術は幸せ呼ぶか

る。身の回りが勝手に便利になっていく。そのとき、自分に、居場所は残されているのか。

十五世紀、グーテンベルクが発明した活版印刷は、書物を大衆化した。数世紀かけて、近代国家や資本主義といったシステムを生んでいった。科学技術が発達させた。十五世紀の人々は、その技術がそのように巨大な果実を人類にもたらすことを空想していたのだろうか。そして私たちは、歴史に何を学ぶのだろうか。

アナログの千年から、デジタルの千年への境目にさしかかった。今は激動期。情報家電だ、モバイルだ、ブロードバンドだ、デジタルテレビだ、ユビキタスだ。技術は進歩する。製品は高度化する。サービスは向上する。刻々と進むその向こう、二十四世紀や二十五世紀に、このデジタル技術は何をもたらすのか、空想するチャンスは今しかない。

ITは産業を刺激する。日本にしる、中国にしる、欧米にしる、ITは経済を引っ張る役割を期待されている。同時に、それが文明に及ぼす意味も考えてみたい。十七日



から始まる「ケータイ国際フォーラム」がそのようなことを見つめ直す場になればと期待している。